



## 第36期第3回京都市社会教育委員会議の模様をマナビィがレポート！

令和6年3月7日（木）に、[京都まなびの街生き方探究館](#)（以下、生き方探究館）において、第36期京都市社会教育委員会議の第3回目となる会議が開催されました。「生涯学習につながるキャリア教育の在り方 ～新しい体験学習プログラムについて」が議論されました。

### ■ 出席委員（17名のうち14名） ※五十音順

伊住 禮次郎 委員、大脇 晋太郎 委員、佐竹 美都子委員、  
園部 晋吾 委員、豊田 まゆみ 委員、永田 紅 委員、中本 貴久委員、  
七海 薫子 委員、二宮 靖男 委員、本郷 真紹 委員、柁木 良子 委員、  
松田 規久子 委員、森 清頭 委員、森口 真希 委員

### 第36期第3回社会教育委員会議次第

開 会

#### 1 議 事「生涯学習につながるキャリア教育の在り方 ～新しい体験学習プログラムについて」

- (1) 京都まなびの街生き方探究館からの説明
- (2) 施設見学
- (3) 協議
- (4) 京都モノづくりの殿堂・工房学習の説明

#### 2 報 告

- (1) みやこ京まなびいニュースレター及びみやこ京まなびミーティングについて
- (2) 令和6年度京都市教育委員会予算案について
- (3) 令和6年度「学校教育の重点」について

#### 3 主催事業及び刊行物の案内

閉 会

### ■ 議 事「生涯学習につながるキャリア教育の在り方 ～新しい体験学習プログラムについて」

#### ○ 事務局説明（小野生涯学習推進課長）

生き方探究館は、京都市のキャリア教育の推進のために設置された施設で、様々な企業や団体の協力を得ながら小中学生を対象に、学校の授業として取り組める体験型のキャリア教育学習プログラムを提供しています。コロナ禍で社会状況が変化したことを踏まえ、令和4年度から新たな学習プログラムを開発しています。



社会の中で自分の役割を果たしながら自分らしい生き方を実現していくことを目指すキャリア教育には、体験活動などを通して子どもたちが将来に向けて主体的に学び続けることの重要性を認識させることや、個人や社会のウェルビーイング（身体的・精神的・社会的に満たされた状態）の向上につながるなどが期待できます。

本日は、生き方探究館の新しい学習プログラムを題材に、生涯学習の観点から見た今後のキャリア教育のあり方を協議したいと思います。

#### ○ 事務局説明（生き方探究館 川合企画推進室長）

生き方探究館は、キャリア教育の拠点施設として、京都市立小中学校に体験学習の機会を提供しています。運営には、多くの企業や市民の方にボランティアとして協力いただいています。

当館では、発達段階に応じて3つのプログラムを提供しており、小学5年生対象の「わくわく WORKLAND」と中学1年生対象の「ジョイ JOBLAND」を令和4年度に刷新しました。大きな社会状況の変化もあり、コロナ禍で体験活動ができなくなった2年間を利用して、京都市独自のプログラムを開発し、現在その検証を進めています。今後も改良を重ね、未来社会を見据えた新たなキャリア教育プログラムを構築したいと考えています。

新プログラムでは、自分らしい心豊かな生き方を実現し、持続可能な社会の創り手となることのできる子どもの育成を目指しています。そのために、子どもたちが自分で課題を見つけて解決する力と、他人と協働して新たな価値や納得解を生み出す力を育てることを重視しており、物事を柔軟に捉え、新たな問題発見につなげる活動と、非認知能力を引き出す活動を重点的に行っています。具体的には、これまで物やサービスを売る仕事に特化していた体験を、アイデアを考え出す仕事に変更しました。体験を通して、子どもたちが将来につながる気づきを得て、日常の学習意欲が高まるなどの変化を期待しています。

「わくわく WORKLAND」は、小学5年生を対象に、新規採用された社員として働く体験をします。子どもたちは新規採用者研修を受け、商品販売などの定常業務の体験や「新商品を考える」といった正解がない課題に取り組みます。

「ジョイ JOBLAND」は中学1年生を対象に、就職活動をする学生として活動します。業務の実践体験と就活準備の実践体験の2つの活動があり、業務の実践体験では、協賛企業から派遣された社員の指導のもと、指示された業務課題に取り組みます。例えば、新しい結婚式のスタイルを考えるなど、新たな価値やアイデアを生み出す課題が設定されます。

就活準備の実践体験では、自己分析を行い、企業の情報を調査し、自分と企業との相性を分析します。この活動は、市民ボランティアが進行を担当し、生徒に様々なアドバイスをすることで、生徒が視野を広げ、多くの気づきを得られるような運営方式を採用しています。



## ■ 施設見学



## ■ 協議

○ 森 清頭 委員（北法相宗宗務長、清水寺執事、上智大学グリーンケア研究所非常勤講師）

学校の学習と実生活はつながっているので、先生方のフォローが大切だと思います。学習内容が日常生活や社会情勢とどのように関連しているかを理解することで、学習の重要性が生徒にフィードバックされます。

企業のブースについては、伝統産業やスタートアップ企業があるとおもしろそうだと感じました。京都の大企業もスタートアップから始まっているので、世の中の現状をどう捉え、何を必要とされているかを考えることは、とても大切なことです。

この施設を一般向けに有料で開放しても楽しいと思います。



○ 榎木 良子 委員（同志社大学日本語・日本文化教育センター嘱託講師）

社会が刻々と変化して新たな技術が現れており、今後さらに加速して変化していきます。これらの変化にしなやかに対応していける精神力、対応力が必要になってくると思います。

祖父がワコールの創業メンバーだったので、戦後の日本で創業された経緯や、その後の成長について、祖父母からよく話を聞いていました。社会や時代が思い通りに受け入れてくれない戦後の困難な時期に、どのように仕事に向き合い、乗り越えていったかを知ることができました。

また、経営者の講演会や本を読むことが好きで、その思考や哲学を、悩みを解決するための参考にしています。折れない精神や、仕事をするという覚悟を持つこと、自分にとっての仕事がどういう存在なのかを理解することが重要です。そして、経営者の哲学や、実際に体験されている言葉は説得力を持つので、そのようなことを学ぶチャンスがあれば良いと思います。このような経験や学びは、仕事だけでなく、生きていく上でも非常に参考になります。



○ 七海 薫子 委員（市民公募委員）

施設での体験を通して、子どもたちが京都で働きたいと思うようになると良いと思います。また、未来社会では人とAIの協働が必要だと言われますが、人間の持つ独自の能力を引き出すことに注力したほうが良いと思います。特に、AIが苦手とする個別のケースへの柔軟な対応は人間が補うべきで、そのための教育が必要です。さらに、AIに取って代われない職種としてコンサルティングやカウンセリングなどがあり、これらの能力を引き出す体験や職業訓練があると良いと思います。



○ 森口 真希 委員（株式会社堀場製作所 理事 管理本部副本部長）

新しいことにもチャレンジされ、ほんまもんを追究する精神を感じました。また、企業のブースはそれぞれ非常にリアリティがあり、それが感受性豊かな子どもたちにとって重要であると感じました。

一方で、昭和の時代から企業のスタンダードとしての見せ方が変わっていない部分もありました。子どもたちには過去から現在、そして未来への変化を感じて想像力を膨らませてもらうことが大切で、今の状況を知るだけでももったいないと思います。実際の現場では会議のあり方や無人化など、働き方も含めて非常に大きく変化しています。過去100年の変化が、この20年で起こると言われる中で、先を見通す力や新しい発想がキーとなってくるのではないのでしょうか。



大阪・関西万博に向けて、各企業が2050年の未来を皆さんに見せようと奮闘しています。関西の子どもたちは万博を見る機会があると聞いていますので、子どもたちの世界観を広げる機会になればと期待しています。

○ 佐竹 美都子 委員（株式会社西陣坐佐織代表取締役、アテネオリンピックセーリング競技日本代表）

私が小学生の頃、商店街の活性化について考える授業がありました。一人一人が各店のオーナーとなる設定で、学校の近くの商店街で聞き取った内容をまとめ、発表をしました。私はクラスで1人、商店街を潰してモールにしたほうが良いと発表すると、反対されてとても辛かった記憶があります。そのような経験があるから印象に残っているのかもしれませんが、自分事として取り組むことは大切だと思います。



社会では、企業に属し、今あることからの派生で問題を解決していくことと、スタートアップ（新規事業を立ち上げる）など、ないことへ挑戦するという仕事があります。今はインターネットも普及し、自分のためだけに生きることは簡単にできますが、そこに本当の満足があるのか。職業体験を通して、人のために役立っているという実感が、自分の人生に満足度を与えてくれることを体験してほしいです。

また、4年生で体験した時と同じ企業で、5年生ではさらにステップアップしたことを学ぶのもおもしろいと思います。来年も同じブースで体験すると思えば、日常生活で問題に気付くアンテナを張るのではないのでしょうか。加えて、ブースを出している企業間で連携し、どのようなこ

とができるのか可能性を探っていくのもおもしろいのではないのでしょうか。

○ 松田 規久子 委員（京都新聞社文化部編集委員兼論説委員）

京都新聞のブースはリアルで、中学校用プログラムの業務課題に「京都新聞ウェブサイトのアクセス数増の方策」というのがあり、本当に実践的なものを取り上げていると思いました。今、新聞は紙からウェブに変化し、文字が読まれなくなってきていますが、紙かウェブのどちらで発信していくのか、プログラムの内容を少し変えないといけないと思ったところです。

中学生は感受性が強く、何かに影響を受けたら、これをやりたいとすぐに道が定まることもあります。就活準備の実践体験では、事前事後学習で取組をされているとは思いますが、自分が何の仕事にマッチングしているのかわかった後に、自分は何がやりたいのか。そして、自分がその仕事をするためには、これからどういうことをしていけばいいのかを、中学生に考えさせるような学習があると、将来について確固たるものができるのではないかと思います。



○ 永田 紅 委員（歌人、京都大学特任助教）

プロの指導の下で体験するのはとても楽しいと思います。一方で、10年後には、今はまだプロのいない仕事が増えているはずですし、そのような視点も子どもに教えてあげられると良いと思いました。今後、組織に属さず個人で活動する人が増えると思います。活動で失敗した場合、組織に属しているとある程度フォローしてもらえますが、個人の場合、失敗からどうリカバーするか、失敗してもオーケーだという思考回路も頭に入れておく必要があります。

偉人の伝記などを読むのもわくわくするものですが、失敗したからこそ成功に至った具体例を示すことで、失敗を恐れずに挑戦することの面白さを伝えられると良いと思います。



○ 本郷 真紹 議長（学校法人立命館理事補佐・立命館大学文学部特命教授）

個人で仕事をしている人、特に技術を持つマイスターの体験談を元に、そのような生き方も一つの選択肢であると認識させることは大事です。その体験談は、失敗からのリカバリーや成功への道のりを理解する上で参考になると思います。



○ 伊住 禮次朗 委員（茶道総合資料館副館長）

2040年代を想定した新しい会社を作るというプログラムについて、子どもたちが考える前提となる情報を整理して示すことが大切です。2040年の時代背景や人口動向などの情報を最初に整理すると、「人口がこれくらい減った日本でこのような未来を作りたい」と、アイデアが出しやすくなると思います。



○ 園部 晋吾 委員（NPO 法人日本料理アカデミー副理事長、山ばな平八茶屋主人）

事前・事後学習がどのように行われているのかわからないので一概には言えませんが、この施設の体験だけでは、部分的な体験になっている気がしました。体験した企業の考え方は学べますが、それがどうつながっていくのか。仕事観や仕事に対する考え方が大事だと思います。仕事の種類（一次、二次産業など）や形態（会社員、自営、起業）など、仕事全般についての授業をした上で、実際にこのような施設で体験したり、中学2年生で職場体験（[生き方探究・チャレンジ体験](#)）をする。単体で行うと一つのイベントで終わってしまうので、それをしっかりと普段の学習とつなげていくことが大切だと感じました。



○ 事務局（川合室長）

一日の体験活動だけでは部分的になるのは当然で、学校での事前学習と振り返りが大切です。学校には、事前事後学習をしっかりと行えるようモデル例や指導計画案を提供しています。その中で、子どもたちは働くとは何かを考え、社会にはどのような仕事があるのかを調べていきます。そして活動後には、自分が将来どういう生き方、仕事をしていきたいのかプランをまとめます。また、学校には様々な教育活動とこのプログラムを連動させるよう求めています。

○ 豊田 まゆみ 委員（一般社団法人京都市地域女性連合会理事）

子どもたちがグループで調査・発表し、まとめる学習が将来につながります。中学生も、課題について自分で考え、タブレットを使ってクラス全体で共有するという学習パターンが増えています。学校で培われたそのような経験が、この施設での体験で活かされていると感じました。中学生のチャレンジ体験では、接客など実際の仕事を体験しますが、この施設では実際の職場ではできない計画立案などもできるので、とても良いと思いました。実際の場所を見て体験すると「見えないところではこんなことしてるんだ」と発見があったり、心に残ったりします。職場体験と施設での体験の両方が大切です。



この施設は企業の協力があってこそこの施設ですが、伝統産業や農業など仕事の範囲をさらに広げると良いと思いました。

○ 大脇 晋太郎 委員（市民公募委員）

小学生用プログラムは、子どもがコンテンツを作る体験をさせようということかと思いますが、AI を使ってコンテンツを作ることは考えていますか。

学校現場では、生成 AI や ChatGPT はカンニングツールと否定的に捉えがちです。今年1月には、OpenAI 社が「Sora」というテキストで動画を作る AI を作り、世界にリリースされました。学校教育で AI を使うことは、デジタルネイティブの人々が社会人になる中で必要なことだと思います。

AI を使うと、10人で行う仕事を1人で行うことになり、残り9人の仕事



がなくなると考えがちですが、ジェンソン・フアン CEO（米半導体大手エヌビディア）は、それぞれが10人がかりの仕事をして、その時にAIを使うべきだという話をされていて、物事の本質を捉えた話だと思いました。また、堀場製作所では、今まで培ってきたリソース（資源）を使って、それぞれが新しいビジネスを広げ、その上で売上をのばすことを考えたり、新しい働き方をしてみてはどうかと代表がおっしゃっていました。そこから考えると、やはりAIの使い方自体を抜本的に変えていく必要があると思います。

AIは、便利なものですので、道具として捉え、問題を解決することが重要です。AIは、子どもだけでなく大人に対しても、生涯学習やビジネスをする際の良い機会・良い場所になると思います。

○ 二宮 靖男 委員（京都市小学校長会理事、京都市立翔鸞小学校長）

最初にここを訪れる小学4年生は、将来自分たちが仕事をするとはわかっていますが、それを職業として捉えて考えることは、ほぼ未経験です。京都でものづくり企業を立ち上げられた方々の話に触れて、様々な職業や仕事について理解していきます。

子どもたちは、この体験学習で「点」を打ちます。そして、生活や学校の学習、友達との関わりの中でも様々な「点」を打って、それがあるときピピッと線でつながる瞬間があります。そこで初めて自分の将来の展望がひらけていき、社会的・職業的な自立の一步を踏み出すと思っています。

20年後、今とは全く違う世界に踏み出す子どもたちが、過去に自分が打ってきた「点」をしかりつないで、新しい挑戦に向かって進んでくれることを願っています。



○ 中本 貴久 委員（令和5年度京都市PTA連絡協議会会長）

新しいプログラムには、SDGsやレジリエンス、ウェルビーイングなどの要素が含まれており、率直に良いと思いました。1回だけの体験では少なく感じますが、時間や学校数などを考慮すると難しいのかと思います。

また、大人も参加できると良いです。保護者に学んでもらうことによって、子どもの教育がより良くなれば良いです。小・中学校のPTA連絡協議会の方々に情報発信し、一人でも多くの方にこの施設を知っていただき、学んでもらえたら良いのではないかと思います。



○ 事務局（川合室長）

20年後にはAIなどが出てきて仕事の在り方も大きく変化します。来年度に向けては、構想段階ですが、子どもたちに20年後の商品・サービスを考える活動をさせて、今と未来の両面から、社会は大きく変化していくことに気付いてもらえるようにしたいと考えています。

また、人間ならではの価値（例えば人と人との接客など）を大切にしながら変化を遂げるべき点を見つけることも重要です。変化をよしとする人もいれば、一方で伝統や文化を守っていかないといけない面もあります。それぞれの価値観や興味関心がありますので、子どもたちが楽しく

体験しながら、未来の生き方を考え、自分のキャリア形成につなげてほしいと思っています。

本日いただいた意見を反映させながら、新しいプログラムをより良いものにしていきたいと思います。また、探究館ホームページで新規の協賛企業の募集をしていますので、興味のある企業があればご紹介いただけたらありがたいです。

## ■ 京都モノづくりの殿堂・工房学習の説明

### ○ 事務局（川合室長）

小学校4年生を対象にした当館3つ目のプログラムが「[京都モノづくりの殿堂・工房学習](#)」です。京都はものづくり都市と言われるように、京都を代表するものづくり企業の協力を得て実施しています。企業のこれまでの歩みや創業者の思い、技術・製品などを紹介した企業ブースから成る「京都モノづくりの殿堂」という施設があり、そこで調べ学習に取り組むとともに、簡単な工作実験をして、企業が持つ代表的な技術・製品の仕組みを体験するプログラムになっています。生きる力の源泉となるよう自らの将来や夢に向かう意欲を高めることを目指しています。

「京都モノづくりの殿堂」は、夏、冬、春に一般公開しているよ！ぜひ見に行ってみてね。



### ○ 本郷議長

ICTの充実に関連して、文部科学省が高校でのICT機器の充実のために1,000万円の補助を公募したにもかかわらず、「情報Ⅱ」が受験科目でないため、進学校がこれに応じなかったそうです。受験科目にあるからやる、ないからやらないのではなく、子どもたちに新たな機会を提供するために、意識を変える必要があります。今後の取組に期待しています。



## ■ 報告-1 <sup>みやこ</sup>京まなびいニュースレター及び<sup>みやこ</sup>京まなびミーティングについて

「京まなびいニュースレター」を発行しました。この号では、「プラスせんぼ」という京都市のキャッチフレーズを紹介し、歩くことを増やす健康習慣をテーマにしています。佐竹委員による健康と運動に関するコラムも掲載しています。

また、委員の皆様による京まなびミーティングをアスニー特別講演会として5月10日に本郷議長、17日にサコ委員による講演を予定しています。

## ■ 報告-2 令和6年度京都市教育委員会予算案について

第一次編成予算では、学校の管理運営に関する経費などを中心に、前年度比で107億円増の約1,159億円を計上しています。教育委員会では、事業見直しや職員数の適正化に取り組むとともに、学力向上対策や伝統文化体験、GIGAスクール構想による先進的な学びの実現、いじめ対策、不登校児童生徒への支援強化、部活動の地域連携、全員制中学校給食の推進などを進めています。生涯学習につきましても、図書館での電子書籍サービスの充実をはじめとした、市民の生涯学習環境の充実に向けた取組を進めています。

## ■ 報告-3 令和6年度「学校教育の重点」について

全教職員と教育委員会、地域・保護者と、学校教育を進めるための指針や重点取組を共有するために毎年策定しています。

「伝統と文化を受け継ぎ、次代と自らの未来を創造する子ども」を「目指す子ども像」として、具体的な3つの姿や、全教職員に意識してもらいたい学校園づくりの5つの柱と「生きる力」を育む15の取組を示しています。社会の急激な変化、デジタルトランスフォーメーションの進展など、学校教育を取り巻く環境も大きく変わる中、今年度はウェルビーイングの実現を意識し、子どもたち一人一人のウェルビーイングを実現できるように取り組むこと、そして教職員の「働きやすさ」「働きがい」の両立を目指すことを新たに記載しています。

## ■ 主催事業及び刊行物の案内

### ■ 宮前生涯学習部長挨拶

### ■ 閉会

会議終了後、「京都モノづくりの殿堂」を見学しました。



※この摘録の作成には、補助的に生成 AI を利用しています。